

日文中訳における動作主と被動者の取り扱いに関する問題点

—台湾人による連体修飾構造の翻訳を中心に—

Problems Regarding How to Deal with Agents and Patients in Translation from Japanese to Chinese:

Focusing on Translation of Noun Modifier Structures by Taiwanese Translators

蔡 佳樹

(宇都宮大学大学院国際学研究科博士後期課程)

Japanese noun modifier structures are generally hard to catch and tricky for Japanese-Chinese translators from Taiwan because of their complexity and lengthiness. This paper aims to investigate their difficulties and how to do with agents and patients when translating the structures. By contrasting explicitness of agent and patient noun phrases in the structures, the study formulates a hypothesis of the possible causes of difficulty. Then by using the hypothesis it analyzes sample sentences translated by Taiwanese translators speaking Mandarin Chinese natively in order to find common problems and identify the reasons of mistranslation. It also examines how the findings could be applied to Japanese language education and translation education. Finally it proposes three solutions: 1) specifying case relations, 2) specifying and expressing agents and patients as words and 3) grasping the structure in each noun modification. And it emphasizes that none of these three should be ignored as they relate to each other.

1. はじめに

台湾の大学の日本語学科では、日本語を専攻する学生が専門技能として日中翻訳法を学習し、専門知識を研究の対象としている。その学習成果は翻訳力の質向上だけではなく読解力強化などにもつながる。それに、学生が卒業後日中翻訳の実務に関わる可能性が極めて高い。台湾の日本語教育全般にとっても重要な存在なのである。一方、日本語の出版物を中国語に翻訳して出版する際、台湾人などの繁体字中国語読者向けに、台湾人中国語話者の表現習慣に合わせて分かりやすい訳文を提供することを考慮して、台湾人訳者に翻訳を任せることが多い¹。同じく中国語母語話者とはいえ、中国で使われている簡体字中国語と言葉遣いなど表現習慣が違うのである。例えば、村上春樹などの著名な日本人作家のものを含む多くの作品が、台湾と中国では違う訳者による訳本が刊行され流通している。したがって、日中翻訳の分野では中国語母語話者である台湾人読者と台湾人訳者が無視できない一つの大きな言語社会を成り立たせていると言えよう。

日本語は動作主 (agent) と被動者 (patient) を言い表わさないことが多いのに対して、中国語は動作主と被動者が単語として文中に現れないと、意味内容の誤解を招きやすい。このため、翻

訳の実務では人称や代名詞などを使ってはっきりさせるのが普通である。本稿はこのことを動作主と被動者の「提示」と呼ぶ。特に文構造が極めて長くて複雑な日本語の連体修飾構造を中国語に訳す際に、動作主と被動者を特定して訳文中に提示する手法は不可欠と言えよう。つまり、中国語訳では“誰が”、“何を”をはっきり示さなければならないのである。

中国語母語話者が日文中訳する際、動作主と被動者が言い表わされない日本語原文の意味内容を正しく捉えられない、または捉えられても訳文の適切な位置に明示する処理ができず、完全に誤訳したり、不自然で流暢さに欠けた訳文を作ったりしてしまうことが多い。日本語学習の観点からこのような誤りを分析してみると、学習過程において、日本語の特徴及び中国語との表現上の相違などの習得に問題点があると考えられる。また、日本語と日中翻訳法の教育において、動作主と被動者の提示についてははっきりとした指導方法が確立されていないと言わざるを得ない。本稿はこうした動作主と被動者の提示法の問題点を中心に、中国語母語話者である台湾人の実際の訳例を分析し、日文中訳における取り扱い方を考察する一方、日本語教育の観点から、日本語の習得と日中翻訳法の学習上の改善を提言することを目的とする。

なお、本稿が対象とする「連体修飾構造」とは、あくまで形式的に規定されるもので、名詞句の前に節が置かれ述語が連体形となる形式すべてを含む。なぜなら、このような形式全般に共通した翻訳上の問題が見出せるからである²。

2. 日本語と中国語の動作主と被動者の提示

ここではまず、動作主と被動者の提示において、日本語と中国語の表現上の相違を確認し、中国語において提示が重要であることを示したい。

(1)

原文：「悪い子が遊ぼうと言っても、遊んではいけません。もし、しつっこく来るようなら、ママが追い返してあげます」（と母は言った）。

訳文 a：壞孩子即使叫去玩，也不許去，如果老是來找，媽媽就趕回去。

訳文 b：壞孩子即使叫你玩，你也不能去玩。要是他們老來找你，媽媽就(替你)把他們趕回去。

(龐 1999 : 69)

日本語原文は「悪い子」と「ママ」という動作主だけが言い表わされている。訳文 b は、中国語として自然な文に翻訳する必要から動作主と被動者を提示したものである(波線部分が提示の部分である)。これを日本語に直訳すると、「悪い子が(あなたに)遊ぼうと言っても、(あなたは)遊んではいけません。もし、(彼らが)しつっこく(あなたを誘いに)来るようなら、ママが(あなたのために)(彼らを)追い返してあげます」になる。この訳文で分かるように、中国語では動作主と被動者を提示してはじめて“誰が”、“何を”という意味内容がはっきり示される。それと対照的に、訳文 a は日本語の字面どおりに中国語に直訳したものにすぎず、動作主と被動者を明示するといった、いわば意味内容の取り扱いの配慮が全くされておらず、曖昧で誤解を招き兼ねない表現に

なっている。この例からうかがえるように、動作主と被動者の提示において日本語の表現と中国語の表現は大きく異なっていると言える。

それでは、動作主と被動者の提示において、何故日本語と中国語は異なった表現をするのか。この問題については、日本語が動作主と被動者を示す名詞などを明示しなくてもよい理由について次の先行研究の考察がある。

小池(2001)は日本語の表現について次のように説明している。

日本語の表現としては、判断対象主に関する情報は、文脈から提供されれば十分に明示される必要はないということである。

一方、遠藤(1989)は日本語の方が中国語より主語を提示しなくてもよい理由を次のように主張する。

日中両語では主語は述語に対しほとんど支配力を持たず、不可欠のものではない。この傾向は日本語のほうが中国語よりもさらに強く、日本語では述語一本立て、述語中心であるとさえ言うことができる。こうした文法上、構文論上の理由以外に、日本語では謙譲表現や授受表現が非常に発達しており、また男と女、お年寄りと中年、青少年、子供では使う言葉に違いがあるということが主語の省略をいっそう可能にしている。

それでは、何故中国語は日本語ほど動作主と被動者を示す主語などを省略することができないのか。これについて石綿・高田(1990)は「現代中国語では人称代名詞がかなり発達してきており、英語のように主語の代名詞を常に明示するというほどではないが、日本語よりもずっとよく人称代名詞を使用する」と主張する。

また、呉(2001)の考察によると、二言語間にこのような差異が生じる理由として次の三つがあるという。

1. 中国語は能動的動詞、とくに他動詞を使って行為の主体とその対象を明確に示すことに対し、日本語では自発性をもつ自動詞を使うことが多く、行為の主体を省略することが多い。
2. 日本語では敬語のような身分や対象の違いによって表現が異なる言語形式があるので、人称を表す主語や賓語を省略しても、話し手の身分や互いの関係を推測することができる。
3. 日本語では、助詞や助動詞を使って文の各成分の間の文法的関係をはっきりさせることが出来るが、中国語にはそのような働きをもつ文法的マーカーがない。

上述した先行研究の指摘を踏まえ、日本語と中国語の相違を次の例文で検証する。

(2)

原文：ママが体を起こした時、黒いスーツを着ているのに気がついた。

訳文：媽媽起身的時候，我注意到她穿的是黑色西服套裝。

(龐 1999 : 70)

人称を一つだけ提示している原文に対し、中国語訳は波線部分のように動作主を示す「我（私）」と被動者のママを示す「她（彼女）」を明示し、「ママが体を起こした時、（彼女が）黒いスーツを着ているのに（私は）気がついた。」という表現で構成要素間の論理関係を明示している。この例から、動作主と被動者をよく言い表わさない日本語に対し、中国語は意味内容をはっきりさせるために提示するのが普通であることが分かる。

以上、動作主と被動者の提示について日本語と中国語の表現習慣を考察してきた。両言語が異なった表現習慣を持っている理由は次のようにまとめることができる。

日本語は助詞や助動詞など構文上の特性、敬語や授受表現など話し手や聞き手の違う立場を示す言語形式、または文脈から動作主や被動者が判断できるため、動作主と被動者を示す主語や人称を提示しない場合が多く、提示しなくても文中の各成分の意味上の関連性を把握することができる。日本語と対照的に、中国語は文中の意味内容をはっきりする文法的標識が日本語ほど発達しておらず、文脈から動作主や被動者を見分ける材料が少ないため、動作主と被動者を示す主語や人称を提示しないと意味内容が曖昧になることがあり、読者に誤解を与える文になりかねない。

3. 連体修飾構造の日文中訳における動作主と被動者の提示

日本語の連体修飾構造は連体節と修飾される名詞すなわち被修飾語から構成され、連体節は被修飾語の前に置かれる。本稿は、次の先行研究の連体修飾構造の文型構成に対する指摘を踏まえ、連体修飾構造を定義する。

奥津 (2004)は次のような主張をしている。

いま X と N(名詞)という二つの要素があり、それが [XN] の順に並んで、X が N にかかり(修飾し)、N は X を受け(修飾され)て、N と同じ性質のまとまり、名詞句(「連体名詞句」と呼ぶ)となるような言語現象を「連体修飾」という。この場合の X を「連体成分」、N を「主名詞」と呼ぶことにする。

a 僕は去年【海】に潜った。

b 僕は去年【【パラオの】【海】】に潜った。

c 僕は去年【【真っ青な】【【パラオの】【海】】】に潜った。

d 僕は去年【【頭上をバラクーダの群れが泳ぐ】【【真っ青な】【【パラオの】【海】】】】に潜った。

上述した例(下線部は連体節、二重下線部は被修飾語、以下同じ)のように、連体修飾構造は名詞句のひとまとまりである。しかし、例文を見ると分かるように、その内部は一重(b)、二重(c)、三

重(d)構造、もしくはそれ以上に極めて長く複雑な構成となる可能性がある。つまり、連体修飾構造は、文法上の多重構成のため、理解が容易ではない複雑な要素が一つの文に含まれる長文である可能性があると言える。

一方、中国語の連体修飾構造の構成について、黄 (2003)は次のように指摘している。

現代中国語の連体修飾構造は、定語と中心語から構成されている。中心語は連体修飾構造の「底」で、被修飾語である、定語は中心語の修飾成分で、付加成分である。(中略) 定語の特性によって「的」を伴わないこともあるが、「的」は定語の形式上の標識とも言える。これらの要点から見ると、中国語の連体修飾構造は、日本語の連体修飾構造と対応している。しかし、中国語では定語には非制限的な用法があり、中心語の後に置かれてその補足説明にすることができるが、日本語では、連体節がすべて被修飾語の前に置かれなければならない、この点は日中両国語の連体修飾構造の違いであると言える。

その一例として、黄 (2003)は「英國是個尊重自由的國家。(イギリスは自由を尊重する国だ(筆者訳))」を挙げている。

この考察を見て分かるように、中国語には日本語と対応している連体修飾構造がある。しかし、連体節は補足説明として被修飾語の後に置くことがあり、表現上は完全に日本語と一致しているとは言えない。さらに、中国語の連体修飾構造の標識とも言える「的」の使用に関し、呉(2001)は中国語訳文を評価する際に「「的」を連続的に三回使ったこの表現は、やはり中文としては拙劣である」と指摘している。つまり、中国語で「的」が多すぎると、不自然になってしまい、逆に読者の理解を阻害しかねないのである。

上述した先行研究の指摘で分かるように、日本語と中国語の連体修飾構造は一見対応している形式を持っているが、実はそれぞれ表現上の特徴がある。したがって、日文中訳をする際、長くて複雑な成分で構成される可能性がある日本語の連体修飾構造を取り扱うとき、意味内容を正しく捉えるためには、まず原文で提示されない動作主と被動者を特定して明示することが不可欠である。次に、中国語は動作主と被動者を提示しないと意味内容が曖昧になり誤解を与えかねないため、日本語原文の動作主と被動者を特定した後、如何に中国語の句型構成に合わせて訳文に適切に動作主と被動者を置き、日本語の意味内容を中国語で正しく理解しやすく説明するかが重要である。つまり、日文中訳の視点で考えると、連体修飾構造の原文を正しく捉え訳文で適切に転換するといった、いわば適訳を作るための動作主と被動者の取り扱いは翻訳作業の第一歩であり、その重要性は疑いようがない。

4. 動作主と被動者の取り扱いに関する不適訳の分析

今回は中国語母語話者である台湾人を対象に訳文を収集した。対象者が日中翻訳に従事する可能性とその日本語能力を考えた上で、1) 日中翻訳に関わる可能性が高いこと、2) 日本語学習者と

して上級に属すること、という二つの条件を満たす者として、台湾や日本で日本語を専攻している学生(学部4年生と大学院生)16人と、台湾や日本で翻訳の仕事に従事する翻訳者³19人、計35人を対象者にして訳文を収集した。対象者の日本語学習歴と翻訳歴の均一化はそれほど重視しなかった。むしろ、1節で述べたような一般的な訳者に該当する人を可能なかぎり対象とし、台湾人訳者に共通の問題点を取り出し、上級者である、あるいは日中翻訳に従事した経験を持っているにも拘らず犯した誤りを分析した。

翻訳問題の日本語原文として、①台湾人作家が書いた中国語作品の日本語訳文と②日本人作家が書いた作品の日本語文の2種類を利用した。今回は調査対象者の中国語の訳文が適訳か否かを確認するための手段として、訳例1~4では上述した①台湾人作家が書いた中国語作品の日本語訳文を調査実施時の日本語原文として採用した。この手法を取れば集める訳文は二重翻訳データになるのであるが、日本語母語話者に語感を尋ねた上で、調査時の文に文法的逸脱がなく日本語として悪文ではないことを採用の基準にした。また、調査対象者に二重翻訳であることを知らせずに訳してもらうため、単に日本語文を中国語に訳すという指示のみを行った。仮に中国語原文の同形同義語がそのまま使われていたとしても、この日本語自体は正しさ・自然さにおいて問題はない。集めた訳文は二重翻訳に起因する問題を含まないデータである。

また、翻訳問題に使用された作品はいずれも台湾や日本で中国語版と日本語版の両方が出版されているので、①の中国語版原文と②の中国語版訳文を、対象者の訳文を分析する際、表現の適切性を判断するための参考基準(絶対的基準ではない)とする⁴。

では、動作主と被動者の取り扱いに関する問題点を実際の訳例を見て検討してみよう。

【訳例1】

原文：数年後、ある家電会社の企業イメージの広告をつくるため²、ありったけの知恵を絞りだそうと、有名人の言葉ばかり集めた原書を繰っていたとき²、彼は林さんのこの口癖が、カール・マルクスの一八四八年の『共産党宣言』にあるの²をはじめて知った。

(三木訳、朱1999:42)

日本語原文に下線と二重下線を引いて示したとおり、三つの連体修飾構造が含まれている。文全体の構造を見るといずれも独立しており一方が他方を内に含む関係にないが、意味内容においては互いに密接に関連している。今回集めた35人の訳文を分析してみると、曖昧な表現などをのぞけば、原文の動作主と被動者を正しく特定して訳文に明示できたのは20人である。共通した不適訳パターンの代表として1-1~1-4の四つの訳文を以下に示す。

1-1：幾年後，爲了製作某家電公司的企業形象廣告，我絞盡所知道的(数年後、ある家電会社の企業イメージの広告をつくるため、私が絞りだす(筆者訳、以下同))…。

1-2：幾年後，一家家電公司爲了製作企業形象廣告（数年後、ある家電会社が企業イメージの広告をつくるため）…。

1-3：數年後，爲了製作一間家電公司的形象廣告，絞盡腦汁的思考之下，無意間順手翻著一本偉人

名言集時、第一次知道林先生的口頭禪，居然是出自卡爾馬克思一九四八年的共產黨宣言（数年後、ある家電会社の企業イメージの広告をつくるため、ありったけの知恵を絞りだそうと、有名人の言葉ばかり集めた原書を繰っていたとき、林さんのこの口癖が、カール・マルクスの一八四八年の『共産党宣言』にあるのをはじめて知った）。

1-4：…初次發現了林先生的口頭禪是馬克思的 1848 年『共産黨宣言』（林さんの口癖がカール・マルクスの一八四八年の『共産党宣言』であるとはじめて知った）。

1-1 は、原文で明示されていない「知恵を絞りだす」という動作の動作主を第一人称の「我（私）」にしてしまっている。1-2 は、「企業イメージの広告をつくる」という動作の動作主を企業である家電会社と誤訳してしまっている。1-3 は、原文に沿って訳しただけで動作主と被動者を一切明示していない。1-4 は、口癖の内容が「共産党宣言である」と誤解してしまっている。

このような不適訳につながった原因については次のように考えられる。

- ① 今回集めた誤訳例から見ると、日本語原文の動作主と被動者を特定できないとき、とにかく第一人称の「私」にしてしまう傾向がある。(1-1)
- ② 助詞が示す格関係を正しく特定できないために、誤解する例が見られた。例えば、1-2 で「家電会社の」を「が」と、1-4 で「『共産党宣言』に」を「で」と誤認した訳例があった。
- ③ 特定できない動作主と被動者をあえて明示して誤訳をしてしまうというリスクをおかすより、原文に沿って字面どおりに訳すほうが無難であるという考え方がある。(1-3)
- ④ 文脈や文構成から動作主や被動者を見分けられない場合は一般常識を基準として判断してしまう。例えば、1-2 は「企業イメージの広告をつくるのはもちろん家電会社だ」と理解してしまっている。

これらの誤りを回避するために、原文で提示されていない動作主と被動者を提示することを解決策として選ぶならば、次のような文になる。

・ 数年後、[S1 が] ある家電会社の企業イメージの広告をつくるため、[S2 が] ありったけの知恵を絞りだそうと、[S3 が] 有名人の言葉ばかり集めた原書を繰っていたとき、彼は林さんのこの口癖が、カール・マルクスの一八四八年の『共産党宣言』にあるのをはじめて知った。

原文で明示されていない動作主は [S1] と [S2]、[S3] である。この三つの動作主が一体何かを判断する根拠は次の二つであると考えられる。

- ① 波線で示した形式名詞の「ため」と助詞の「と」の機能を根拠として判断すれば、(S1) と (S2)、(S3) が同一人物である可能性が高いとわかる。
- ② 原文に明示されているただ一つ、文の最後に置かれている「彼」(波線部)と「彼」の後にある助詞の「は」をもとに文全体の意味内容を考えると、(S1) と (S2)、(S3) は「彼」のことであると理解できる。そうすると、三つの連体修飾構造の意味表現上の関連性も把握できるようになるであろう。

【訳例2】

原文: ぼくが、アメリカの華僑社会が全面的に巻き込まれるかもしれないと思うようになったのは、ある日のたそがれ時、近所の奥さんが遊びに来て、「六合彩」(香港のテレビによる宝くじ)の賞金について説明しはじめたときだ。

(池上訳、平路 1997:224)

2-1: 在我認爲已被捲進美國華僑社會 (僕は自分がアメリカの華僑社会に巻き込まれたと思ったのは) ...。

2-2: 我會覺得好像快融入美國的華僑社會 (僕は自分がアメリカの華僑社会に巻き込まれそうと思ったのは) ...。

2-3: 會讓我認爲自己或許已經完全融入了美國華僑社會的原因是 (僕は自分がすでにアメリカの華僑社会に巻き込まれたと思ったのは) ...。

下線部と二重下線部で示すように日本語の原文の前半と後半にそれぞれ一つずつ連体修飾構造がある。今回集めた訳文の中に、動作主と被動者を正しく捉えて適訳をしたと言えるのは17人である。一方、誤訳がほとんどは、原文前半の連体修飾構造の方に集中していることがわかる。また、取り上げた代表的な訳文2-1~2-3を見ると共通した誤訳のパタンが見出せる。それは、巻き込まれるのは「アメリカの華僑社会」ではなく「自分」だとしてしまう誤訳である。原文の意味内容を理解する過程で、動作主を特定する際に上記のような誤りを犯した原因は次のように考えられる。

- ① 「ぼくが、アメリカの...」。原文の意味内容を理解する上で極めて重要な読点を見落とし、「ぼく」が「思う」の動作主を指示し得るということに気付かない。(2-1、2-2、2-3)
- ② 「ぼくが、アメリカの華僑社会が全面的に巻き込まれる」。二回連続して出た助詞の「が」が示す格関係を特定できない。また、巻き込まれるのは「アメリカの華僑社会」ではなく「自分」だと誤訳してしまったことを見ると、同じ助詞が重複するとき、その助詞と関係付けられる動詞を特定することができなくなるようである。(しかし母語話者であれば、「華僑社会」の後に付けられた「が」に着目し、「華僑社会」と「巻き込まれる」とが局所的に関係付けられることに気付くので、前出の「ぼく」が巻き込まれるべきものと解釈される可能性は排除され、「思った」の動作主となるかもしれないと考えることができる。) (2-1、2-2、2-3)
- ③ 「巻き込まれる」の前に助詞「に」があるため、「に」の前にある「アメリカの華僑社会」が動詞「巻き込まれる」と関係付けられ、「アメリカの華僑社会に巻き込まれる」と誤解してしまったことが考えられる。「全面的」を無視してしまうのである。(2-1、2-2、2-3)
- ④ 原文に動作主の「ぼくが」と動作内容を意味する「思うようになったのは」の間に挟まれる形式が比較的長いので、短文表現に慣れている⁵中国語母語話者にとっては読解の妨げになると考えられる。(2-1、2-2、2-3)

すなわち、日本語文の動作主を正しく特定するために役に立つのは、連体修飾構造「ぼくが、アメリカの華僑社会が全面的に巻き込まれるかもしれないと思うようになったのは」の中にある二つ

の助詞「が」である。助詞の機能の正しい認識にもとづいて判断し、文中の二つの「が」がついた名詞句「ぼくが」と「アメリカの華僑社会が」に呼応する述部を正しく特定できれば、長い連体修飾構造の意味内容であっても正しく理解することができるであろう。

この翻訳問題の日本語原文について、六合彩が話題となっていることがわかるような先行文脈が示されていないならば正しい翻訳は困難であるという見方もある⁶。しかし、六合彩は台湾でも一時大きな社会問題を起こし注目の話題になったものであり、かつ、この名称が文中にも現れているので、正しい翻訳は十分可能であると考ええる。日本語母語話者であれば六合彩を知らなくとも容易に「巻き込まれる」の動作主を特定することができるということを考え合わせれば、誤訳の原因はやはり連体修飾構造が正確に把握されていないことであるとせざるを得ない

【訳例3】

原文：夜になると、太陽はいつとき熱の力を失い、まれに弱々しい風が都市をとりまく小さな山から吹いてきて、盆地いっぱいによどんでいた熱気がかすかに揺れ動くこともあった。

(櫻庭訳、李 1999:5)

3-1：從小山吹來微微的涼風包圍著城市（山から吹いてくる弱々しい風が都市をとりまく）…。

3-2：從小山上吹下的微風包圍了都市（山から吹いてくる弱々しい風が都市をとりまく）…。

3-3：微風瀰漫著都市吹過山間（風が都市をとりまいて山を吹き渡る）…。

これに関して原文の動作主と被動者を正しく捉えられたのは14人である。不適訳の訳文を分析してみると、誤訳を生じさせた原因はやはり下線を引いて示した連体修飾構造にあることがわかる。「弱々しい風が都市をとりまく小さな山から吹いてきた」は一見して構造は簡単だが、実は「弱々しい風」と「都市をとりまく小さな山」と二つの連体修飾構造を含んでいる。そして、格助詞の「から」で起点となる「山」を示し動詞の「吹く」と関連づけられるのである。

今回集めた訳文の多くは上記の3-1~3-3と同様、「都市をとりまく」の動作主を正しく特定できず、「風が都市をとりまく」と誤解してしまったものである。その原因は次のように考えられる。

- ① 「風が都市をとりまく小さな山から吹いてきて」のような長い構造の意味内容を理解する際、助詞をすぐに次に現れる動詞と関連づける傾向があると言える。つまり、「が」で示す動作主「風」が行う動作は「とりまく」だと理解してしまうのである。このような誤りの原因は連体修飾構造が不完全にしか把握されていないことにあると考えられる。(3-1、3-2、3-3)
- ② インターネットの検索エンジン Google(<http://www.google.co.jp/>)で「とりまく山」と「とりまく風」をキーワードとして検索を行うと、検索結果は1,780,000件対314,000件⁷であった。これを目安とすると、日本語母語話者に対して「とりまく」をするのは「山」だという認識が強いと言えよう。しかし、日本語非母語話者にはこのような組合せをする表現習慣に対する認識はないというのは事実である。(3-1、3-2、3-3)

【訳例4】

原文：その十数日間というもの、Aさんは父が制服を着た運転手について朝早くから運転練習に出かけ、夕方まで戻ってこないのをいつも眺めていたが...

(櫻庭訳、李 1999:244)

4-1：A 一直眺望著穿著制服當司機的父親... (Aさんは、制服を着て運転手になった父...をいつも眺めていた)。

4-2：A 君凝視著父親穿上制服、一早出門跟著司機練習駕駛... (Aさんは、父が制服を着て朝早くから運転手について運転練習に出かけて...をいつも眺めていた)。

4-3：A 一直看著父親穿著制服、爲了成爲司機從一大早開始出門練習開車... (Aさんは、父が制服を着て運転手になるために朝早くから運転練習に出かけて...をいつも眺めていた)。

訳例4の原文中には、「父が制服を着た運転手について朝早くから運転練習に出かけ、夕方まで戻ってこないの²」という一つの長い連体修飾構造がある。そしてその中に、運転手の様子を説明する「制服を着た運転手」という短い連体修飾構造が含まれており、いわば重層構造⁸をなしている。「制服を着た運転手」は短くて単純な構造であるにもかかわらず、今回集めたデータにおいては、代表例4-1~4-3に見られるように、「制服を着る」という動作の動作主を正しく特定できず、「父」だと誤解してしまった者の数は15人にもものぼった。その原因はやはり連体修飾構造の取り扱いにあり、次のように考えられる。

- ① 「制服を着た運転手」のような容易に理解されるはずの表現さえ連体修飾構造が正確に捉えられていない。複数の連体修飾構造で構成された重層構造になると、動作主と被動者を特定することがさらに難しくなり、誤訳につながる。(4-1、4-2、4-3)
- ② 訳例3の原因①と同様、「運転手について」の動作主を特定するとき、助詞「が」が付いた「父」をすぐに次に現れる動詞「着る」と関連づけ、「父」を「着る」という動作の動作主だと誤解してしまっている。(4-1、4-2、4-3)

【訳例5】

原文：世界経済、とくに日本経済とアメリカ市場に巧みにリンクすることによって、ゲリラ資本主義は「奇跡」とも呼ばれる高度経済成長を達成した。

(笠原・植野 1995:76)

5-1：世界経済、尤其是日本経済，藉由著與美國市場巧妙的連結（世界経済、とくに日本経済がアメリカ市場に巧みにリンクすることによって...）...

5-2：世界経済中，特别是日本與美國市場巧妙的連結，而達到高度經濟成長這件事，被游擊資本主義稱爲「奇蹟」(世界經濟の中に、とくに日本經濟とアメリカ市場が巧みにリンクして高度經濟成長を達成したことは、ゲリラ資本主義に「奇跡」と呼ばれている)。

5-3：在世界經濟上，特别是日本經濟巧妙地與美國市場需求連結，成功達到稱作游擊資本主義的「奇

蹟」高度経済成長(世界経済の中に、とくに日本経済はアメリカ市場に巧みにリンクして、ゲリラ資本主義と呼ばれる「奇跡」的な高度経済成長を達成した)。

原文の前半に「世界経済、とくに日本経済とアメリカ市場に巧みにリンクすること」、後半に「「奇蹟」とも呼ばれる高度経済成長」という連体修飾構造があり、二つの連体修飾構造は「によって」によって前者を手段として後者が成立するという関連性が示されている。調査対象者のうち、第一と第二の両方の構造に関して動作主を正しく特定して訳文に提示できたのは、わずか7人である。上記の不適訳の代表例 5-1~5-3 を見ると、どちらの構造にも誤訳につながりやすい落とし穴があることがわかる。原因は次のように考えられる。

- ① 第一の構造「世界経済、とくに日本経済とアメリカ市場に巧みにリンクすること」を見ると、名詞「世界経済」、助詞「に」、動詞「リンクする」の三者間の文法上の関連性を十分に理解しようとしなかったことが考えられる。(5-1、5-2、5-3)
- ② とくに「と」と「に」の二つの助詞の格標識としての性質を正しく理解しなかったため、「リンクする」という動作の被動者が何かを特定できず、第一の連体修飾構造の意味内容を誤解してしまったのである。(5-1、5-2、5-3)
- ③ 第二の連体修飾構造「「奇蹟」とも呼ばれる高度経済成長」を正しく捉えられない原因は、「ゲリラ資本主義」の後に付いた助詞「は」の機能を見落としてしまい、後半の文が複文構造の主節であることや、「ゲリラ資本主義」が動作主であるということが理解されなかったことにある。さらに、「呼ばれる」のような受身表現が原文全体の意味内容を理解することの難易度を高めていることも考えられる。(5-2、5-3)
- ④ アメリカと日本が高度経済成長を遂げた社会であるという固定観念があまりに強いため、動作主と被動者を特定しにくいとき、そのような固定観念を頼りにし「達成した」の動作主を「アメリカと日本」だと安易に決めてしまったことも考えられる。(5-2、5-3)

この原文の意味内容を取り扱うときも、動作主と被動者を判断する決定的根拠はやはり助詞にある。「日本経済とアメリカ市場に巧みにリンクする」の助詞「に」の格標識としての特徴を把握できれば、「リンクする」という動作の動作主を自然に特定できるようになり、第一の連体修飾構造全体も正確に理解できるであろう。一方、助詞「は」が付けられた名詞句「ゲリラ資本主義」が他に競合する名詞句を持たなければ、主節の動作主だと判断でき、翻訳する際にも日本語原文で明示されていない部分を提示できるであろう。

5. まとめ

以上、5つの訳例を取り上げて、中国語母語話者が連体修飾構造の日文中訳をする際に、動作主と被動者の取り扱いに関して問題となることを考察してきた。日本語の連体修飾構造の意味内容を正しく捉え中国語で適訳を作るために、動作主と被動者を特定し明示することが必要不可欠な作業だということが分かる。以下に、考察した結果に基づいて日文中訳における動作主と被動者の取り

扱いに関する問題点と改善策をまとめてみる。

① 格関係の特定

問題点：格関係を示す助詞の機能を見落とししたり（1-2、1-4、5-1、5-2、5-3 など）、助詞が付いた名詞句と動詞との関連性について誤解したり（訳例 2、3、4 のすべての訳文）するため、動作主と被動者を誤って特定してしまう訳例がよく見られる。

改善策：助詞に関する正確な理解は動作主と被動者を正確に特定するための第一歩とも言える。したがって、外国人日本語学習者に助詞の機能及び助詞が表す格関係を正しく理解させ、意味内容を理解するときに助詞と関連づけられるべき動詞や名詞を判断する根拠を日本語学習上の重点として習得させる必要がある。

② 動作主と被動者の特定と訳文における提示

問題点：取り上げた訳文の代表例を分析してみると、明示されていない動作主や被動者を特定できず、したがって訳文において提示をすることができない（1-1、1-2）、または、明示された動作主や文脈情報から明示されていない要素について推測できず、文全体の意味内容をはっきりさせることができない（5-1、5-2、5-3）ことなどは、意味内容を誤解させ不適訳を生じさせる主な原因である。

改善策：動作主と被動者を特定するときに判断の材料として使える文中成分は何か、文中に提示されていないものをどのように見出すか、訳文を作成する際に提示をすべき位置はどこか、などは文型導入の際に正しい文法的特徴が学習されるよう配慮することはもちろんであるが、それに加えて、読解や日中翻訳の授業で復習の機会を設け、理解を確固たるものにできるような活動を行うべきである。

③ 連体修飾構造の把握

問題点：訳文の分析から分るように、調査対象者が連体修飾の基本的な構造さえ十分な把握ができないのが実情である（訳例 4 の「制服を着た運転手」など）。このような状況では、重層構造など意味内容がより複雑な連体修飾構造（訳例 4、5）を正しく取り扱い、中国語の文型構成に合わせて適切に訳文を構成することは不可能である。

改善策：連体修飾構造の学習には、初級日本語文法を学ぶ時期から確実に基本的な構造が学習者に習得されるよう配慮をすべきである。特に複雑な重層構造の各層を一枚一枚と皮をむいていくよう⁹に処理する手法には、基本的な構造に対する正しい理解が不可欠である。単純な単層構造を処理できてはじめて重層構造の取り扱いも、動作主と被動者の特定も可能になるのである。

④ 読点の働きや受身表現の意味の正確な理解

問題点：読点（訳例 2 の「ぼくが」）や受身表現（訳例 5 の「奇跡とも呼ばれる」）は長くて複雑な連体修飾構造において一見して目立たない存在だが、考察した結果から分かるように動作主と被動者を決定するために重要な働きをしており、意味内容を理解する上で重要な成分となる。これが正しく捉えられないことは、不適訳につながる主な原因になる。

改善策：日本語は中国語より頻繁に長文が使われる¹⁰ため、文中に置かれた読点の役割はより重要だと言える。したがって、読点が置かれる文中の位置によって意味に変化が生じることを日本語学習者に理解してもらう必要がある。また、受身表現は、原文理解上の障害になりやすいことが考察結果から分かったように、文全体において受身表現の役割、あるいは、受身動詞述語の格関係を如何に判断するかを重点学習項目として日中翻訳の教育で強調すべきである。

⑤ 常識や固定観念に囚われない、構造的特徴を第一の証拠とした理解

問題点：訳例1の家電会社が企業イメージの広告をつくるとか、訳例5の高度経済成長であるアメリカと日本とか、動作主や被動者が何かを判断するのが困難な場合に、常識や固定観念に左右されて誤訳をしてしまうことがよく見られる。

改善策：翻訳の際、常識や雑学は求められるものである反面、原文理解のための障害になるおそれもある。この点を日本語の学習者に理解してもらわねばならない。翻訳する際、いかに常識や雑学を活用するかに関して、上記①、②、③、④と合わせて、総合的な考慮にもとづいて判断すべきであるということを、方法の指導のなかで明確に教えるべきである。

以上が、連体修飾構造の日文中訳の場合における動作主と被動者の取り扱いに関する問題点を考察した結果であり、それにもとづく改善策である。結果からも明らかなように、動作主と被動者を特定するのに際して、どの問題点も改善策も互いに関連し合っている。したがって、これらを総合的に把握してはじめて、誤訳の問題の解決が可能になるのだということを、本稿をしめくくるにあたって強調しておきたい。

日本語教育と翻訳教育への具体的な応用法については、教育現場での検証が必要となる。この点については今後の課題とする。

.....
【著者紹介】 蔡 佳樹 (TSAI Chiasu) 宇都宮大学大学院国際学研究所博士後期課程在籍。日文中訳を中心とした翻訳学を研究している。修士論文：「日文解釈に伴う台湾人訳者の翻訳上の問題点について—長文の取り扱いを中心に—」(台湾長栄大学日本研究所 2006 年)。連絡先：tsaiyoshiki@yahoo.co.jp

【注】

- 1) 台湾の標準語「国語(北京語)」について、「台湾国語にしても台北国語にしてもいずれ Mandarin Chinese の一変種であることは明らかである」(樋口 2004 : 5)という位置付けを本稿も採用する。
- 2) 本稿は名詞一般がその前に置かれた節に修飾されるもの全般を連体修飾構造と見なす。なぜなら、翻訳においては文法機能の種別が訳者にとっての難易度に影響せず、むしろそのような種別によらず同様の取り扱いが求められるからである(この理由で本稿は準体助詞「の」ともなう形式も連体修飾構造と見なす)。ここでいう文法機能の種別とは、たとえば益岡・田窪(1992 : 36)のものである。単純に事物を指す名詞を修飾する「連体節」とは別に、「こと」「の」「ところ」ともなう補足節、

「とき」「ため」をともなう副詞節を立てている。

- 3) 本稿は、翻訳会社から翻訳の仕事を依頼されるか、または一般の会社で担当する仕事の内容に翻訳が含まれる人を翻訳者と呼ぶ。
- 4) 本稿では、訳例の中国語版原文と中国語版訳文にもとづいた筆者自身の中国語母語話者としての見解以外に、所属大学研究室主催の研究会に同じく参加している他の中国語母語話者6名の意見も聞いた上で、調査対象者の訳文表現の適切性を判断した。
- 5) 龐(1999: 51)は「中國人習慣於使用短句子(中国人は短文に慣れている(筆者訳))」と、また、陸(2001: 177)は「漢語的特點之一是使用短句表達(中国語の特徴は短文表現だ(筆者訳))」と指摘している。
- 6) ある日本語母語話者からこのような意見を得た。
- 7) 2009年12月20日現在。
- 8) 遠藤・武吉(2003: 64)は、「(重層構造の場合)やはり長い連体修飾構造をいかに処理するかという難関にぶつかることが多い。」と指摘している。
- 9) 遠藤・武吉(2003: 64)参照。
- 10) 陸(2001: 177)参照。

【日本語参考文献】

- 石綿敏雄・高田誠 (1990) 『対照言語学』おうふう
- 遠藤紹徳・武吉次朗 (2003) 『新編・東方中国語講座第4巻【翻訳篇】』東方書店
- 遠藤紹徳 (1989) 『中⇄日翻訳表現方法』バベル・プレス
- 奥津敬一郎 (2004) 「連体修飾とは何か」『日本語学』第23巻第3号: 6-16
- 小池清治 (2001) 『現代日本語探究法』朝倉書店
- 黄朝茂 (2003) 「日本語における連体修飾構造の意味とその中国語訳」、黄朝茂『日中翻訳研究論文集』致良出版
- 呉笛 (2001) 「応用日本語学科における翻訳指導の課題と実践—日文中訳について—」『南台応用日語学報』創刊号: 114 - 132
- 樋口靖 (2004) 『台湾語会話第二版』東方書店
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法 - 改訂版 - 』くろしお出版

【中国語参考文献】

- 龐春蘭編著 (1999) 『日文翻譯進階技法』三思堂
- 陸松齡編著 (2001) 『日漢翻譯藝術』臺灣商務印書館

【訳例出典】

- 笠原政治・植野弘子 (1995) 『アジア読本 台湾』河出書房新社
- 朱天心(原著)、三木直大(訳)(1987/1999) 「記憶のなかで」山口守(編)所収『台北ストーリー』国書刊行会
- 平路(原著)、池上貞子(訳)(1990/1999) 「奇跡の台湾」山口守(編)所収『台北ストーリー』国書刊行会
- 山口守(編)(1999) 『台北ストーリー』国書刊行会

李昂(原著)、櫻庭ゆみ子(訳) (1991/1999) 『迷いの園』 国書刊行会